

5) 上咽頭癌に対する放射線治療

末山 博男・杉田 公  
 土田恵美子・伊藤 猛  
 益子 典子・松本 康男 (新潟大学)  
 植松 孝悦・酒井 邦夫 (放射線医学教室)  
 稲越 英機 (同 医療短大診  
 療放射線技術学科)  
 野々村直文・川名 正博 (同 耳鼻咽喉科)  
 佐藤 克郎 (学教室)

我々は1975~94年まで当院にて放射線治療を施行したM0新鮮上咽頭癌57例を対象としてretrospectiveに、治療法、再燃様式、治療成績を検討した。5年累積生存率は51%であった。初回再燃部位では原発部位が多く、次いで遠隔転移であった。T因子の検討ではT4の局所制御率が著明に低下し、N因子の検討では、Nが進行するにつれ頸部リンパ節転移および遠隔転移の発現頻度が上昇した。治療法別では、放治単独よりも化学療法併用、年齢では55歳以下、T因子ではT1-2、病期ではI-IIIが成績良好であった。

6) 非切除非小細胞肺癌 (I~III期) の放射線単独と化学療法併用に関する retrospective study

松本 康男・末山 博男  
 杉田 公・伊藤 猛  
 土田恵美子・植松 孝悦 (新潟大学)  
 酒井 邦夫 (放射線医学教室)

非切除非小細胞肺癌に対する放射線治療の役割は非常に大きい、その成績は観血的治療に比べ、不良である。治療成績改善のために、化学療法の併用や照射方法の工夫などさまざまな臨床研究が行われている。新潟大学放射線科で1980年から94年までの15年間で、60Gy以上の根治照射を受けた(IV期を除いた)128例について、放射線治療単独群(N=74)と化学療法併用群(N=54)との比較及び併用化学療法の時期・種類等の予後因子について検討を加えた。併用化学療法の時期(放射線治療の前・同時・後)と、併用化学療法の内容(CDDPを含むか否か)を比較したが、いずれも奏効率や生存率に有意差はみられなかった。放射線治療の分割方法(通常分割・多分割)による生存率にも有意差はみられなかった。

7) 肺癌脳転移の放射線治療成績の検討

植松 孝悦・酒井 邦夫  
 末山 博男・杉田 公  
 土田恵美子・伊藤 猛 (新潟大学)  
 松本 康男 (放射線医学教室)

(目的) 当科の肺癌脳転移照射症例の治療成績を検討し、放射線治療の意義と予後因子を検討する。(対象/方法) 1981年1月から95年12月までの肺癌脳転移98例。統計学的手法は一般化 Wilcoxon 法と Cox ハザードモデルによる。 (結果) 粗生存率は1年生存率21.4%、2年生存率8.2%、MSTは7カ月、平均生存期間は9.7カ月であった。一次効果、症状の有無、脳外病巣の有無、PSが有意な予後因子であった。神経症状による奏効率は79%で、無再燃率は18%であった。CTによる奏効率は61%であった。死因が明らかであった61例中、脳転移が死因であったのは13%であった。外科的切除施行の有無別には生存率に有意差はみられなかった。(まとめ) 肺癌脳転移の放射線療法は有用である。

8) 早期食道癌に対する放射線治療成績

末山 博男・酒井 邦夫  
 杉田 公・土田恵美子  
 伊藤 猛・松本 康男 (新潟大学)  
 植松 孝悦 (放射線医学教室)  
 稲越 英機 (同 医療短大)

1989~95年まで当科にて13例の早期食道癌に対して根治的放射線治療を施行した。男女比は12:1、平均年齢は73歳であり、全例扁平上皮癌であった。早期食道癌の定義は表在癌の浸潤が粘膜下層までに留まり、リンパ節転移を伴わず、深達度の組織学的確証は問わないと規定した。治療法は外照射単独9例、腔内照射併用3例、化学療法併用1例であった。一次効果では11例にCRが得られたが、CRの1例のみが局所再発し、2例が原病死した。基礎疾患を有する症例が多いため、他病死を5例に認めた。M癌5例の2年原病生存率は100%で、SM癌のそれは64%であった。早期食道癌に対して放射線治療は有効であり、経過観察期間は短い、現在までのところ外科治療成績に匹敵すると考えられた。